

新薬開発で産学官連携

NPO「創薬バリューチエーン」構築

NPO(民間非営利団体)のパイオグリップセンター関西(大阪府豊中市)は四日、関西を中心とする産学官が連携し、新薬開発を目的とするネットワーク「創薬バリューチエーン」を構築したと発表した。同ネットワークに参加したのは大阪大学、京都大学、大阪府立大学、産業技術総合研究所、富士通、NEC、阪大発ベンチャー企業(大阪府茨木市)。

第一弾として、井上豪・阪大助教授が中心になって進める「阪大創薬プロジェクト」から生まれたアレルギー疾患用のタンパク質化合物「HQL-79」をモデルに、コンピューターを使って類似の化合物をつくり出す。

開発にあたっては、高輝度光科学研究センターの高輝度放射光施設「スプリングエイト」(兵庫県佐用町)や、海洋研究開発機構(横浜市金沢区)が保有する世界トップレベルの演算能力をもつスーパーコンピューター「地球シミュレーター」を活用する。このため、標的となるタンパク質の生産

から疾患に効果のある化合物の合成にいたるまでのプロセスを、コンピューター解析と実証実験を併用しながら開発するもので、こう

した産学官組織が発足したのは初めてという。

から解析、化合物の最適化がスムーズに行えると期待している。欧米では新薬の候補物質となる化合物を開発するバイオベンチャー企業が多く、日本の製薬大手との提携が相次いでいる。しかし、日本のバイオベンチャー企業は技術力が高いものの、化合物を提供できる企業は少なく、製薬企業のニーズに対応できない。

創薬に必要なタンパク質の選択から疾患に効果のある化合物の合成にいたるまでのプロセスを、コンピューター解析と実証実験を併用しながら開発するもので、こう

した産学官組織が発足したのは初めてという。

同チエーンをコーディネートしているパイオグリップセンター関西理事の坂田恒昭・阪大客員教授は「要素技術に優れたベンチャーは育っている。今回の試みで、創薬の新しい流れをつくりたい」と話している。

創薬に必要なタンパク質の選択から疾患に効果のある化合物の合成にいたるまでのプロセスを、コンピューター解析と実証実験を併用しながら開発するもので、こう

した産学官組織が発足したのは初めてという。

同チエーンをコーディネートしているパイオグリップセンター関西理事の坂田恒昭・阪大客員教授は「要素技術に優れたベンチャーは育っている。今回の試みで、創薬の新しい流れをつくりたい」と話している。